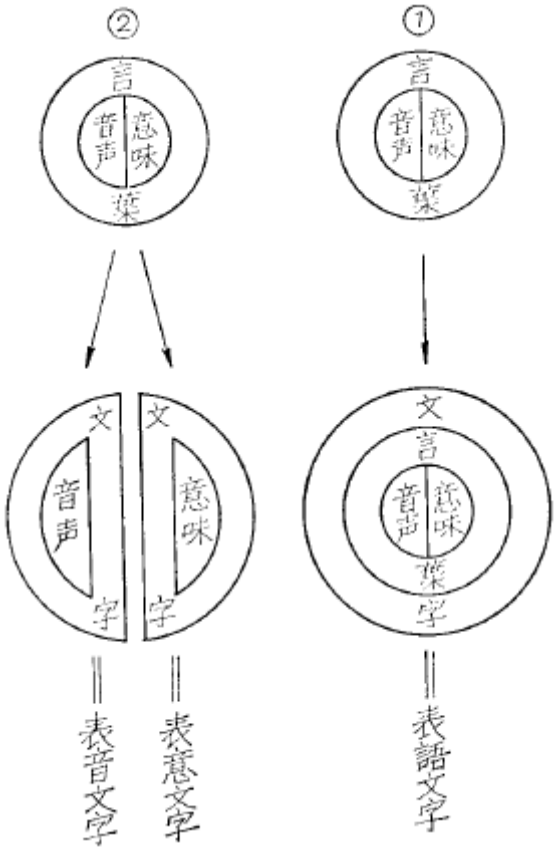
1　創作される文字は必ず表語文字であること

「初めに“言葉”があった。言葉は、その本質からして束の間の存在なので、これを恒久化し固定化するために“文字”が創作された。だから、“文字”は、“言葉”に対応して作られるのが、文字創作の自然の姿であり、当然の成り行きである」と、私は考えます。

また、こうして作られた文字は、“表語文字”と呼ぶべきであり、この表語文字こそ、原始形態の文字であって、同時に、文字として最も望ましい形態のものである、というのが私の考えです。

この考えが間違っているとしたら、是非御指摘を頂きたいと思います。

言葉は、音声の組合せにより、自然の万物から複雑な思想に至るまで、これを符号として表したものです。故に、言葉に対応して作られた文字というものは、その誕生に当って言葉の持つ“発音”と“意味”との両者を兼ね備えているのが当然だと思われます。



例えば、漢字における“山”“川”を例にしてこれを考えてみますと、これらの文字は、“サン”“セン”という特定の音声によって表現される、わが国の“やま”“かわ”という言葉の持つ意味を表す“言葉”を表現したものです。だから、これらの文字は、疑いもなく“音声”と“意味”との両者を表している、と断定することができます。

このように考えて来ますと、特定の音声と特定の意味と、この両者を兼ね備えている漢字を“表意文字”と呼ぶことは、いかに不当なことであるかが、どなたにもお判り頂けることと思います。

表意文字という名称は、表音文字に対立するものとして考えられ、“非表音文字”として受け取られるのが自然です。事実、漢字は、今まで表意文字という名称で呼ばれることにより、“非表音文字”として見られて来ました。

漢字のように、音声と意味を兼ね備えた文字は“表語文字”と呼ぶのが最もふさわしいと思います。事実、漢字の“山”や“川”は、英語の

mountain や river などの“語”(word) に相当するものであって、決してレター(letter アルファベット) に相当するものではありません。

今これを解り易いように図式で示しますと、次のようになります。

私たちは言葉で思考します。言葉を離れては、人間らしい思考はできません。文字が、言葉に対応

して作られるのは当然のことであり、従って、それが“表語文字”という形態のものになるのが当然だ、と私は思うのですが、西欧の学者たちはそうは考えません（それで、外国追随のわが国の学者たちも、漢字を表意文字と呼んでいるのだと思います）。

例えば、著名の言語学者、A･C･ムーアハウスは、次のように述べています。

「これまで示した文字（古代文字を指す）は、言語とは別に発生したものである。かつて生存した民族のいずれを問わず、彼らの絵画的記号や表意文字記号を検討し、判断するには、彼らが話した言葉をわざわざ知らなくてもすむのである。しかし、すべての事物には、それに対応する記号が存在しており、またそれをあらわす言葉も存在したのである。それにもかかわらず、言葉と記号（文字）の間には、元来なんの連鎖も存在しなかった。」（岩波新書『文字の歴史』21 頁）

ムーアハウスの言うところに従えば、文字は、言葉とは無関係に、物そのもの、事そのものを直接に表すものとして作られた、ということになりますから、“表語文字”ではなくて、“表意文字”という言い方が確かにふさわしいと言えます。

しかし、「初めに言葉があった」ことは、彼も認めています。その上で、彼は、言葉とは無関係に文字が作られた、と言うのです。これは随分無理な言い方だとはお思いになりませんか。

なるほど、古代人の話した言葉を知らなくても、その文字を解読することはできます。しかし、それは、単に文字の持つ意味は理解できるが、古代人がそれをどのように読んでいたかは解らない、ということであって、「文字が言葉と無関係に発生した」ことの理由になるものでは決してありません。

文字が文字としての機能を果すためには、人々の間に、それが何を意味するものであるかが、“共通理解”されていなければなりません。その“共通理解”を可能にするものは、必ず言葉でなければなりません。

例えば、“山”という字について、私たちが、その文字としての共通理解を人々から得るためには、すでに存在している“やま”という言葉を使わないで、どうして共通理解が得られると言うのでしょう。言葉がないならば、他の手段も考えられます。しかし、すでに言葉があるのに、その言葉を使わないで、どうして人々の共通理解を得るのか、私には考えることができません。試みに、言葉を使わないで、“山”という字を子供たちにどうしたら教えられるものか、試してみて頂きたいものです。そうすれば、“山”という字が言葉と無関係に存在できるものかどうか、判るだろうと思います。

ムーアハウスは、「文字は、言葉とは別に発生したものであり、両者の間には、何の連鎖も存在しなかった」と言っているのです。どうして、こんなにまで、言葉と関係なしに文字が作られたと主張するのでしょう。つまり、“表語文字”であることを否定し、“表意文字”であることを主張しなければならぬ理由がどこにあるのでしょうか。

私はこう思うのです。西欧の学者たちは、ムーアハウスに限らず、「表意文字は、原始的な文字であり、表音文字はその進化したものである」と、口をそろえて言っています。それは、「彼らは自分たちが用いているローマ字（表音文字）を優れた文字である、と言いたい」ということです。

ローマ字を優れた文字であると言うためには、原始文字を、表音文字に対立する概念である“表意文字”にしなければ具合が悪いのです。というわけは……。

原始文字を“表語文字”であると言えは、それは“表音文字”でもあるわけですから、それが単なる“表音文字”になることに、その必要性も価値も全く与える理由がなくなってしまいます。

ところが、原始文字を“表意文字”であると言えば、それは“非表音文字”になり、表意文字が優れているか表音文字が優れているかの問題は残っても、ともかくも“表音文字”は、“表意文字”にはない価値を持つ文字としての存在理由を獲得することができます。

つまり、“表音文字”が、その価値と必然性とを主張するためには、原始文字が、表意と表音とを兼ね備えた“表語文字”であっては都合が悪いのです。

だから、「原始文字が言葉と無関係に作られた」と無理に主張する彼らの目的は、自分たちの使用する表音文字であるローマ字を、世

界で最も優れた文字に仕立てることに在る、と私は考えるのです。

この憶測は私の曲解でしょうか。しかし、私は、事実をありのままに述べただけのつもりです。それに、これを裏書きする理由もあるのです。それは……。

西欧の人々は、自分のものを、すべて最も優れたものとして、これを他に誇示する性格を持っていることです。

フランス人は、フランス語ほど優美な国語は世界のどこにも見られない、と自負しています。アナトール・フランスなと「フランス語の“笑う”という言葉は、外国語の“笑う”という言葉とは違う」と言っているほどです。

ドイツ人はドイツ人で、「わが国語ほど、明快で、論理的に明晰な表現のできる国語は他にない」と言っており、ロシア人は「わが国語ほど、文学的に豊かな表現力を持った国語は他にない」と言っており、イギリス人は、世界の共通語としての実績を持つ英語に限りない誇りを持っています。

こういう彼らが、自分たちの国語を表記するのに用いているローマ字を、世界一の文字だと誇示しないでいられるわけがないではありませんか。

彼らがローマ字を世界一の文字だと考え、それを主張することは、それはそれで結構だと思います。ある意味では、それは美しいものであり、無理もない主張だと言うことができます。

しかし、日本人までが、それをそのまま素直に受け入れて、「表音文字は優れた文字である」とか、「ローマ字は世界で最も合理的な文字である」と言うのは、何とも情けないことだと私は思うのです。

ムーアハウスは、表音文字の誕生を、次のように述べています。

「一つの物体、例えば“木”は、二つの方法で表現できた。第一に、文字であり、第二は言語である。（石井註＝これらの方法は全く別々に用いられて、その間には何の連鎖もなかった……のである）そのうちに、“木”を表す文字は、tree という言葉を口にした時の音をも表すという考えが現れた。（、、の部分に注意）こうなると、内容から言って、tree という物体に無関係な所で tree という言葉を話す時に発する音を表すために、その文字を用いることが可能になった。例えば、『わなをかける trepan』という意味を表す記号を作りたかった揚合、tree を表す文字と、pan（鍋）を表す文字とを一つに合せてその言葉の音を読

み手に与えて、その要求に応じた。この種の記号は、音を表すために“音標文字（フォノグラム）と呼ばれ、これを用いる書き方を、表音式（フォネチック）という」

彼は、“木”を表す文字は、“木”を表す言葉とは全く無関係の存在であり、従って、“表意文字”であって“非表意音文字”であることを断っています。

その上で、「表意文字が使用されているうちに、言葉との関連が生じ、表意だけでなく表音的価値を持つに至った」とし、“表音的用法”は、文字使用の発展過程の上にはっきりと位置づけされています。

ところで、ムーアハウスの言う“表音式（フォネチック）”と全く同じ現象を、今から千八百年も昔に、中国では、後漢の許慎が“説文”の中で、“仮借（かしゃ）”という言葉でこれを説明しています。

例えば、“工”という漢字は、Ｉで、ものさしの目盛りを表したもので、“ものさし”が本義の字です。後には、“ものさしを使ってする仕事”（工作）、“ものさしを使う人”（大工）という意味にも使われるようになりました。これらは、すべて“コウ”という発音の言葉です。

ところが、これと同じ発音の言葉には、“川の名前”“色の名前”“筋肉の名前”を表す言葉があります。それで、これらの言葉をも、この“工”という字で代用することにしました。この代用する方法を、“仮に借りる”という意抹の“仮借”という名前で呼びました。

ムーアハウスの“表音式（フォネチック）”と許慎の“仮借”とは、呼び方こそ異なれ、全く同じ用法だと言うことができます。ただ違うことは、ムーアハウスは、これを文字の発展的用法であるとし、“表音式（フォネチック）”に偉大な価値を与えているのに対し、許慎は、“仮借”という名称がこれをよく示しているように、“一時的、便宜的、補助的”用法としてしかこれを見ていないことです。

この用法は、許慎の名付けた通り、一時的な便法に過ぎませんでした。というのは……初めは、“工”という文字で書き表されていた“川”は“江”に、“色”は“紅”に、“筋肉”は“肛”になったからです。つまり、それぞれに個有の文字が考案され、それが一般に普及されて行ったのです。“仮借”が、文字通り“仮借”だったのです。

そればかりではありません。“うまくものさしを使う”場合はこれを“巧”。“ものさしを使ってする仕事に励む”場合はこれを“攻”、“ものさしを使ってする仕事を完成させる万場合はこれを“功”というように、

“工”をさらに“巧”“攻”“功”というように、区別して表現することまで考え出して行ったのです。

ムーアハウスの言うように、“表音的用法”が表意的用法よりほんとに優れた用法であるならば、“コウ”という発音の言葉に対して一つの“工”という文字があれば、それでもう十分なはずです。

わざわざ、“江･紅･肛”や“巧･攻･功”という文字を別に作り出すことはないはずです。所が、“工”という字の他に、それより複雑な字形にしてまで、別の字を作ったということは、“表音的用法”が文字としての機能の点て不十分であったからだ、と考えないわけには行かないでしょう。

また、“江･紅･肛”や“巧･攻･功”という文字が作られると、“工”という“表音的用法”が、廃止されるようになっていった事実を見れば、“表語文字”が、機能的に優れていると断定して間違いがないと思います。

では、ローマ字の場合、なぜ“表音式”になってしまったか、それは項を改めて考えたいと思います。この項を終えるに当り、次のことを確認しておきたいと思います。

私たちは“言葉”で思考します。“言葉”は、私たちの思考活動を可能にする、言わば“思考の細胞”とも言うべきものです。この“言葉”に対応して“文字”が作られるのは当然の成り行きであり、そうして出来上った文字が、最も理想的な形態の文字だ、ということができます。

言葉に対応して作られた文字を、“表意文字”と呼ぶことは、“非表音文字”と受け取られる恐れがあるので、“表語文字”と呼ぶべきであることを提唱します。表語文字は、“表意”と“表音”とを兼ねた文字です。